

「話のたねのテーブル」より

クダモノトケイ(パッションフルーツ)は、 情熱的な果物か？

鈴木邦彦

最近、日本でも時々濃い紫色の果実が売られている「パッションフルーツ」は、和名ではクダモノトケイ(果物時計)あるいはクダモノトケイソウという。名前の意味は、「果物として食用にされるトケイソウ」である。英語の名前「パッションフルーツ」のパッション(Passion)を辞書で引いてみると、「情熱」という意味である。熟した果実を割ると熱帯性の強く良い香りがするので、「情熱的な味と香りの果物」と思っている人が多いのではないだろうか。実際にジュースを飲んでみると、本当に情熱的になりそうな熱帯の果物という感じがするのは私だけではないだろう。

しかし、ここでいうパッションの意味はそのような楽しく明るい感じの意味ではない。辞書のPassionの項の終わりのほうに「受難」すなわち「災難に遭う」という意味も書かれている。実は、こちらのほうなのである。この植物の仲間は、トケイソウ(時計草)と言うだけあって、花が開くと時計の文字盤によく似た形になる。5枚ずつの萼と花弁、細く糸のような副花冠が背後を放射状に丸くかたどっている。その中心から軸が伸び、長めの楕円形をした雄しべが5個着いている。さらに、子房(後で果実になる部分)があって、その先には3つに分かれた柱頭がある。これらの姿が、十字架に張り付けられたイエス・キリストを

連想させることから、「受難の花」だという。すなわち *Passiflora* 属植物(トケイソウ)のつるには、キリストが磔になった時の姿を連想させる受難の花が咲く。

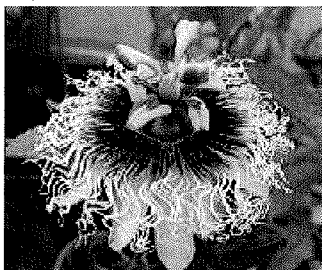
つる性の植物だから、熱帯や亜熱帯の地域では畑に植えて柵や垣根に絡ませて栽培する。関東地方など、冬に霜が降りる地域では、戸外の寒さに耐えることはできないので、温室やビニルハウスで栽培する。一般の家庭では、屋内に取り込み、居間などの凍らない場所で育てるとよい。長く伸ばすと屋内へ取り込みにくいので、鉢に植えて朝顔の鉢栽培用として売られている支柱に誘引して「あんどん作り」にし、暖かい間は日当たりのよい場所に置く。果実を食べた後に採りまきする。春、種子をまくと、早い場合は秋に花が着き、その年のうちに果実が着く場合もある。普通は、2年目の春に伸びたつるに花が着いて果実を着ける。真夏の暑い時期には蕾が落ちてしまう。秋になると黒紫色に熟し、おいしく食べることができる。

トケイソウの仲間には多くの種類がある。熱帯地域を旅すると、道端にクサトケイソウがよく見られる。果実が大きく、2kg ほどもあるオオミトケイなどもあるし、鮮やかな色の花を咲かせる観賞用の種類も多い。

(話のたねのテーブル No.39 より転載)



▲ 観賞用トケイソウの花



▲ クダモノトケイの花



▲ 熱帯・亜熱帯の畑で結実